日蓮大聖人御書全集

聖密房御書

しょうみつぼうごしょ

新版
1198
～
1203

聖密房御書

文永後期　聖密房

大日経をば、善無畏・不空・金剛智等の義に云わく「大日経の理と法華経の理とは同じことなり。ただし印と真言とが法華経は劣るなり」と立てたり。良諝和尚・広修・維蠲なんど申す人は「大日経は華厳経・法華経・涅槃経等には及ばず。ただ方等部の経なるべし」。日本の弘法大師云わく「法華経はなお華厳経等に劣れり。まして大日経には及ぶべからず」等云々。また云わく「法華経は釈迦の説、

大日経は大日如来の説、教主既にことなり。また釈迦如来は大日如来の御使いとして顕教をとき給う。これは密教の初門なるべし」。あるいは云わく「法華経の肝心たる寿量品の仏は、顕教の中にしては仏なれども、密教に対すれば具縛の凡夫なり」と云々。

日蓮勘えて云わく、大日経は新訳の経、唐の玄宗皇帝の御時、開元四年に天竺の善無畏三蔵もて来る。法華経は旧訳の経、後秦の御宇に羅什三蔵もて来る。その中間三百余年なり。法華経亘って後、百余年を経て、天台智者

大師、教門には五時四教を立てて、上五百余年の学者の教相をやぶり、観門には一念三千の法門をさとりて、始めて法華経の理を得たり。

天台大師已前の三論宗、已後の法相宗には、八界を立て十界を論ぜず。一念三千の法門をば立つべきようなし。

華厳宗は、天台已前には南北の諸師「華厳経は法華経に勝れたり」とは申しけれども、華厳宗の名は候わず。唐の代に高宗の后・則天皇后と申す人の御時、法蔵法師・澄観なんど申す人、華厳宗の名を立てたり。この宗は教相に五教

を立て、観門には十玄・六相なんど申す法門なり。おびただしきようにみえたりしかども、澄観は天台をはするようにて、なお天台の一念三千の法門をかりとりて、我が経の「心は工みなる画師のごとし」の文の心とす。これは、華厳宗は天台に落ちたりというべきか、また一念三千の法門を盗みとりたりというべきか。澄観は持戒の人、大小の戒を一塵をもやぶらざれども、一念三千の法門をばぬすみとれり。よくよく口伝あるべし。

真言宗の名は天竺にありやいなや。大いなる不審なるべ

し。ただ真言経にてありけるを、善無畏等の宗の名を漢土にして付けたりけるか。よくよくしるべし。なかんずく、善無畏等、法華経と大日経との勝劣をはんずるに、「理同事勝」の釈をばつくりて、「一念三千の理は法華経・大日経これ同じ」なんどいえども、「印と真言とが法華経には無ければ、事法は大日経に劣れり。事相かけぬれば、事理倶密もなし」と存ぜり。今、日本国および諸宗の学者等、ならびにことに用いるべからざる天台宗、共にこの義をゆるせり。例せば、諸宗の人々をばそねめども、一同に弥陀の名

称

をとなえて自宗の本尊をすてたるがごとし。天台宗の人々は一同に真言宗に落ちたる者なり。

日蓮、理のゆくところを不審して云わく、善無畏三蔵の法華経と大日経とを「理は同じく事は勝れたり」と立つるは、天台大師の始めて立て給える一念三千の理を、今、大日経にとり入れて同じと自由に判ずる条、ゆるさるべしや。例せば、先に人丸が「ほのぼのとあかしのうらのあさぎりにしまがくれゆくふねをしぞおもう」とよめるを、紀のしくぼう、源のしたごうなんどが判じて云わく「こ

朝霧島隠船思詠

淑望順

の歌はうたの父、うたの母」等云々。今の人、「我うたよめり」と申して、「ほのぼのと乃至船をしぞおもう」と一字をもたがえずよみて、「我が才は人丸におとらず」と申すをば、人これを用いるべしや。やまがつ・海人なんどは用いることもありなん。天台大師の始めて立て給える一念三千の法門は、仏の父、仏の母なるべし。百余年已後の善無畏三蔵がこの法門をぬすみとりて、「大日経と法華経とは、理同なるべし。理同と申すは、一念三千なり」とかけるをば、智慧かしこき人は用いるべしや。

「事勝と申すは、印・真言なし」なんど申すは、天竺の大日経・法華経の勝劣か、漢土の法華経・大日経の勝劣か。不空三蔵の法華経の儀軌には、法華経に印・真言をそえて訳せり。仁王経にも羅什の訳には印・真言なし。不空の訳の仁王経には印・真言これあり。これらの天竺の経々には無量の事あれども、月氏・漢土、国をへだててとおく、ことごとくもちて来がたければ、経を略するなるべし。

法華経には、印・真言なけれども、二乗作仏・劫国名号・久遠実成と申すきぼの事あり。大日経等には、印・真言は

あれども、二乗作仏・久遠実成これなし。二乗作仏と印・真言とを並ぶるに、天地の勝劣なり。四十余年の経々には「二乗は敗種の人」と一字二字ならず無量無辺の経々に嫌われ、法華経にはこれを破して二乗作仏を宣べたり。いずれの経々にか印・真言を嫌うことばあるや。その言なければ、また大日経にもその名を嫌わず、ただ印・真言をとけり。

印と申すは手の用なり。手、仏にならずば、手の印、仏になるべしや。真言と申すは口の用なり。口、仏にならず

ば、口の真言、仏になるべしや。二乗の三業は法華経に値いたてまつらずば、無量劫、千二百余尊の印・真言を行ずとも、仏になるべからず。勝れたる二乗作仏の事法をばとかずと申して、劣れる印・真言をとける事法をば勝れたりと申すは、理によれば盗人なり、事によれば「劣れるを勝ると謂う見」の外道なり。この失によりて閻魔の責めをばかぼりし人なり。後にくいかえして、天台大師を仰いで法華にうつりて、悪道をば脱れしなり。

久遠実成なんどは、大日経にはおもいもよらず。久遠

実成(じつじょう)は一切(いっさい)の仏(ほとけ)の本地(ほんじ)。譬(たと)えば、大海(たいかい)は久遠実成(くおんじつじょう)、魚鳥(ぎょちょう)は千二百余尊(せんにひゃくよそん)なり。久遠実成(くおんじつじょう)なくば、千二百余尊(せんにひゃくよそん)は浮草(うきくさ)の根(ね)なきがごとし。夜(よる)の露(つゆ)の日輪(にちりん)の出(い)でざるほどなるべし。天台宗(てんだいしゅう)の人々(ひとびと)、このことを弁(わきま)えずして、真言師(しんごんし)にたぼらかされ誑(たぶらかす)たり。真言師(しんごんし)はまた自宗(じしゅう)の誤(あやま)りをしらず、いたずらに悪道(あくどう)の邪念(じゃねん)を積置(つみおく)。

空海和尚(くうかいわじょう)は、この理(り)を弁(わきま)えざる上(うえ)、華厳宗(けごんしゅう)のすでにやぶ破られし邪義(じゃぎ)を借(か)りとり取りて、「法華経(ほけきょう)はなお華厳経(けごんぎょう)におとれり」と僻見(びゃっけん)せり。亀毛(きもう)の長短(ちょうたん)、兎角(とかく)の有無(うむ)。亀(かめ)の甲(こう)には毛(け)な

し、なんぞ長短をあらそい、兎の頭には角なし、なんの有無を論ぜん。「理同」と申す人、いまだ閻魔のせめを脱れず。「大日経に劣る、華厳経になお劣る」と申す人、謗法を脱るべしや。人はかわれども、その謗法の義、同じかるべし。弘法の第一の御弟子・かきのもときの僧正、紺青鬼となりし、これをもってしるべし。空海改悔なくば悪道疑うべしともおぼえず。その流れをうけたる人々、またいかん。

問うて云わく、わ法師一人この悪言をはく、いかん。

答えて云わく、日蓮はこの人々を難ずるにはあらず、た

だ不審するばかりなり。いかりおぼせば、さておわしませ。外道の法門は、一千年・八百年、五天にはびこりて、輪王より万民こうべをかたぶけたりしかども、九十五種共に仏にやぶられたりき。摂論師が邪義、百余年なりしもやぶれき。南北の三百余年の邪見もやぶれき。日本二百六十余年の六宗の義もやぶれき。その上、このことは、伝教大師のある書の中にやぶられて候を申すなり。

日本国は大乗に五宗あり。法相・三論・華厳・真言・天台なり。小乗に三宗あり。倶舎・成実・律宗なり。真言・

華厳・三論・法相は大乗よりいでたりといえども、くわしく論ずれば皆小乗なり。宗と申すは、戒・定・慧の三学を備えたるものなり。その中に定・慧はさておきぬ、戒をもって大小のほうじをうちわかつものなり。東寺の真言・法相・三論・華厳等は、戒壇なきゆえに東大寺に入って小乗律宗の驢乳・臭糞の戒を持つ。戒をもって論ぜば、これらの宗は小乗の宗なるべし。

比叡山には、天台宗・真言宗の二宗、伝教大師習いつたえ給いたりしかども、天台円頓の円定・円慧・円戒の戒壇

立つべきよし申させ給いしゆえに、「天台宗に対しては真言宗の名あるべからず」とおぼして、天台法華宗の止観・真言とあそばして、公家へまいらせ給いき。伝教より慈覚たまわらせ給いし誓戒の文には、天台法華宗の止観・真言と正しくのせられて、真言宗の名をけずられたり。天台法華宗は仏立宗と申して、仏より立てられて候。真言宗の真言は当分の宗、論師・人師始めて宗の名をたてたり。しかるを、事を大日如来・弥勒菩薩等によせたるなり。仏御存知の御意は、ただ法華経一宗なるべし。

小乗には二宗・十八宗・二十宗候えども、ただ所詮の理は無常の一理なり。法相宗は唯心有境。大乗宗、無量の宗ありとも、所詮は唯心有境とだにいわば、ただ一宗ならば、ただ一宗なり。三論宗は唯心無境。無量の宗ありとも、所詮、唯心無境ならば、ただ一宗なり。これは大乗の空有の一分か。華厳宗・真言宗、あがらば但中、くだらば大乗の空有なるべし。経文の説相は、なお華厳・般若にも及ばず。ただし、よき人とおぼしき人々の多く信じたるあいだ、下女を王のあいするにたり。大日経等は下女のごとし。理は但中

にすぎず。論師・人師は王のごとし。人のあいするによっていぼうがあるなるべし。

上の問答等は、当時は世すえになりて、人の智浅く慢心高きゆえに、用いることはなくとも、聖人・賢人なんども出でたらん時は、子細もやあらんずらん。不便におもいまいらすれば、目安に注せり。御ひまにはならわせ給うべし。

これは大事の法門なり。こくうぞう菩薩にまいりて、つねによみ奉らせ給うべし。

日蓮　花押

聖密房（しょうみつぼう）にこれを遣（つか）わす。